慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

· ·	
Title	玉野井芳郎編著 マルクス価格理論の再検討
Sub Title	
Author	持丸, 悦朗
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.2 (1963. 2) ,p.195(105)- 196(106)
JaLC DOI	10.14991/001.19630201-0106
Abstract	
Notes	世界経済特集 新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630201-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新 刊 紹

H・ガース、ライト・ミルズ共著 山口和男、 『マックス・ウェーバー 大伏宣宏共訳

-その人と業績-

二編には「権力」と題して「経済と社会」お この原書は巻頭にここに邦訳されたウェーバ Galaxy Book として紙装版が出されている。 国でも広く読 まれてい たが、一九五八年 Work の部分約七〇頁の邦訳である。原書は Y., 1946 S Introduction : The Man and His From Max Weber : Essays in Sociology, N. オクスフォード大学出版部から出版されわが ロンビア大学元教授故ライト・ミルズの共著 よび「社会学・社会政策論集」の中から「権 の「人と業績」という序論を載せ、第一編 本書はウィスコンシン大学教授ガースとコ 「学問と政治」と題して「職業としての政 および「職業としての学問」を収め、第

> てあるわけである。 が多くあるが、ガース及びミルズの編著は、 会」、「国民性とユンカー」の外に、「宗教社 深い経済史的論文「資本主義とドイツ農村社 いわばゼミナール用に手際よくダイゼストし ーの著作にはこのほかにも大部の重要なもの 「中国の読書人」 を収録している。 ウェーバ 会学論集」より「バラモンとカスト」および 否とその諸方向」を、第四編には極めて興味 第三編は「宗教」と題して「宗教社会学論集」 ント教派と資本主義の 精神」「宗教的現世拒 から「世界諸宗教の社会理論」「プロテスタ リスマ的支配の社会学」「規律の意味」を、 力の構造」「階級・身分・党派」「官僚制」「カ

そそる。第二章「政治的関心」は政治的知識 「多面的人間像」および「精神の緊張」を扱 人ウェーバーが国民主義的立場に立ちつつも の烈しい精進、病気の苦しみ、アメリカ旅行、 よる「ウェーバー伝」を中心に、彼の学問へ の最もよき内面的理解者たる妻マリアンネに っていて我々の共感と同情と興味を限りなく ここに邦訳された「序論」は、ウェーバー

> じて方法論にまで及び、その近代文化観を分 クス主義観、官僚制とカリスマの日常化を論 る。第三章「知的志向」はウェーバーのマル もち、民主的方向を示している点を 指摘す ビスマルク的・カイザー的専制に強い反感を

二二五頁・三五〇門) す、いわばアメリカ人の見たウェーバー論で ある。(ミネルヴァ書房・ 社会科学選書33 ローグ」としてのみ扱わず、内在的理解を示 的ヒューマニスト」や「ブルジョアのイデオ 以上の如く、本書はウェーバーを「基督教

—中村勝己—

野々村一雄著

『ソヴェト学入門』

る。また、ソ連社会の本質をなす社会主義に る書物や資料がいくつもソ連から出されてい ついても理論的解説はマルクス以来汗牛充棟 いる。すなわち、ソ連の各般の問題を説明す 「ソ連については、ソ連自身が多くを語って

場合は日本人としての立場からし を形成するための、一つの手引きということ るための、あるいは、綜合的・体系的なソ連 ヴェト学入門』とは、ソ連を外から は、ソ連を外から正しく見ることであり、アソ まれた。言葉をかえていえば、ソヴェト学と 生じてくる。ソヴェト学はこのようにして生 の客観的・綜合的な理解と判断を下す必要が 般とも違う。そこでロシア人以外の人間が外 同じではないし、ソ連社会主義は社会主義 連は必ずしもソ連人自身が考えているものと もただならぬほど出版されている。だが、ソ ソ連を具体的に見て、ソ連について 一正しく見 この

れはじめた。この言葉は主に、ソ連ないしは は中共について Sinology という言葉も使わ クレムリンの動向に注意をはらい、革命記念 説明するためであった。日本語では耳新しい この言葉は、実は、英語では Sovietology と Kremnology とかしばしば使われ、最近で 以上長々と序文を引用したが、幾分耳新し 「ソヴェト学」という言葉を著者の言葉で

> なのである。 研究こそがソヴェト学の深い研究を示すもの 的書物の見当らないのは当然であり、個別的 で述べているように、「ソヴェト学」の一般 いように思われる。著者が参考文献のところ にあるのだから特に「学」といわなくてもい 便宜的なもので、その目ざす所は綜合的判断 来経済学とか政治学とか分類されているのは 系的に理解するということらしい。 しかし本 の「ソヴェト学」はこの意味とはちがって体 するのかどうか私には疑問である。野々村氏 とに使われている。これはいずれも「学」と どを調べてソ連政治権力の変化を研究するこ 日のときフルシチョフの隣にいるのは誰かな いう字をつけているが果たして「学」に値い

二一八頁・二〇〇円) 観を知る好個の手引書であろう。(中公新書 野を大へん 面白く 記述した 読み 物である。 治・経済・スプートニク・外交など多くの分 「学」 という意味は不明でも、 ソヴェトの概 しかし本書は、ソヴェトの地理・歴史・政 一加藤

玉野井芳郎編著

『マルクス価格理論の再検討』

「転形問題」 なかったことによるのかもしれない。事実、 決定的に重要な意味をくみとるこ とができ 技葉末節の議論とみなし、その背後にひそむ ばならないであろう。あるいは、この現象は、 ならば、まったく不思議なことといわなけれ みないほど進展をしめしていることを考える ことはわが国の『資本論』研究が、他に例を にとっても、かならずしもその意義が明確で わが国のマルクス経済学者が、「転形問題」を うになったのは最近数年のことである。 この わが国でこの問題が真剣にとりあげられるよ の間で活発な議論が展開されてきた。しかし 問題」としてイギリス、アメリカの経済学者 形」について論じて以来、この問題は「転形 よりながら、マルクスの価値の価格への「転 理論』において、ボルトキェヴィツの方法に P·M·スウィージーが、『資本主義 発展の はこれを議論している 人々自身

一 <u>五</u> (一九五)

あったということはできないであろう。

近として評価している。)第三部「転形間 潤率について、価値タームのそれを第一次接 であると結論される。(もっとも神里氏は利 値を価格に転形することは無意味な計算遊戯 よることなく決定することが可能であり、価 との差異が追求され、 などの問題をめぐって、価値次元と価格次元 は表式的均衡と再生産、利潤率、実質賃金率 形問題』(公文俊平・竹内靖雄・神里公)で が指摘されている。第二部「価格理論と『転 階で、別々に考慮することが不当であること までの議論が詳細に検討され、総価値=総価 態として生産価格を把握する立場から、これ をめぐって」(桜井毅) においては、 価格形 格への転形を検討する。第一部「『転形問題』 にするとともに、多面的な角度から価値の価 の議論の論点を整理し、その意義をあきらか 本書は、これまでの「転形問題」について 総剰余価値=総利潤の命題が無意味であ また表式的均衡を価値の段階と価格の段 へのコメント」 (中村隆英・村上泰亮) 生産価格体系は価値に

> である。 な代替の問題などにふれた興味あるコメント は表式との関連、商業資本との関連、技術的

される。 ドックス・マルクシスト」たちの反響が期待 ない問題であろう。本書にたいする「オーソ くこの問題はあらためて議論しなければなら 否定につらなるものなのであろうか。おそら にとどまるのであろうか、それとも全体的な ろうか。それは単に労働価値説の部分的否定 の存在にとってどのような意義をもつのであ このような労働価値説の評価は、労働価値説 当むずかしい」(はしがき、「玉野井芳郎)と いうことであろう。とすれば価格理論からの 「労働価値説を価格決定の 基礎におくのは 相 諸論文が示唆することは大ざっぱ にいえば しては提出されていない。しかし、これらの 部と他の部分とではかなりのへだたりがある と思われる)その結論もまた一致したものと ら書かれているものではなく、(とくに第二 本書の諸論文はかならずしも共通の立場か (青木書店・A5・二九七頁・九三

吉田静一著 『フランス重商主義論』

現われた経済政策をさす。 想されるような、コルベールの時代のそれで こでは対象となるフランス重商主義とは、予 っとも端的な性格づけとなろう。ただし、 はなく、市民革命とナポレオンの大陸封鎖に をこころみたもの、といえば、この研究のも 方法によって、フランス重商主義への再接近 イギリス重商主義研究の成果と、その分析

これに対して著者は、イギリス重商主義研究 暗黙のうちに前提されていたといってよい。 コルベールにのみ結びつく、という理解が、 業資本育成のための「議会的重商主義」とで ある。ところがフランスにおいては、コルベ 「絶対王制的重商主義」であり、 た。一つは、王の金庫をふくらませるための、 義は 二つの 段階を もつこと が明らかにされ イギリス重商主義の研究によって、重商主 ルティズムの名が示すとおり、 重商主義は 他は国内産

型の意識は明確である。 る。その点、 経済政策の中に、見出すべきことを主張す は、フランスでは革命政府と、ナポレオンの 本の育成を主眼とする議会的重商主議の段階 阻止的な役割を果すものであること、産業資 の骨子とし、国内産業資本の自由な発展には って、ギルド的規制、特権、独占をその政策 は、厳密には王室財政のための貿易政策であ 念をフランスに適用し、コルベールティズム でえられた重商主義の二つの段階という概 著者の、資本主義発展の段階と

みずからを表明するという。 イギリス資本との対抗の必要-は、国内産業の自由 その意味で この 段階の フランス 重商主義 -の主張、対外的な保護政策 一反独占、反特権、反ギ ーにおいて、

革命をめぐる農民問題、ないし、土地制度の 革命としての大革命に集中してきたためであ それは第一に、フランスの歴史研究が、政治 ギリスのそれに比べてかなりおくれている。 従来、フランス資本主義発展の研究は、イ ようやく盛んになったフランス

> なかろうか。 ことが、今後のフランス研究の課題なのでは 機的に結びつくか、それを具体的に検討する の展開、この三つのモメントがどのように有 民層の成立および分解過程、そして産業資本 ためでもあるといえよう。市民革命、 とされるイギリスに集中して研究されてきた 的に結びつけられなかったためであり、第三 媒介とする産業資本の支配の確立過程と具体 展開に関する最近の研究成果が、産業革命を に、産業資本発展の論理が、一般にその典型 自営農

びつけ、 果している。 解した従来の見解に対して重要な問題提起を ポレオンやシャプタルの経済政策の中に検証 フランス産業資本発展の論理を革命政府やナ の発展という見地から再検討すべきであると した。その点重商主義をコルベールにのみ結 ンス革命とナポレオンを、フランス産業資本 いう問題提起にあったといえよう。著者は、 べてに解答しようということではなく、フラ ところで本書の意図は、そういう問題のす 市民革命を主に政治的過程として理

> 提起された問題はわれわれ にも 課されてい い。とはいえ、問題提起はなされたのであり、 に結びついていることと対比されねばならな なった。イギリス重商主義が学史研究と緊密 か、その関連を今後の課題として残す結果と 論理体系としての経済学に まで 結晶される 産業資本育成の政策が、いかにして経済学、 析が政策の分析にとどまったことは、他方、 にまで深められなかったためと思われる。分 産業資本の展開が、重商主義的制度と政策の 分析され、結びつけられている、とはいえな 中でのみ検証されるにとどまり、構造的分析 ことが指摘されねばならない。それは、初期 とのつながりの中で、必ずしも十分有機的に ば、この問題が、上にのべた他の二つのモメ て意味があるのだが、その内容に関していえ このように本書は、その問題提起自体とし (未来社・A5・二五三頁・五八〇円) 市民革命と農民層の分解過程

一野地洋行—